

# 疫病と都市

2020年現在、新型コロナウイルス感染症は、世界の各地でとりわけ都市において猛威をふるっている。

ただし疫病と都市の結びつきは決して新しい現象ではなく、歴史の上で大きな被害を出した疫病の多くは、都市を主な舞台としてきた。

また疫病と都市の結びつきのあり方も、人間の往来や集中が感染機会の拡大をもたらしたという

単純な図式にはとどまらない。疫病は歴史の大半を通じて原因不明の現象であり、このため疫病との戦いには都市のあらゆるリソースが動員された。ここには、平時では明らかにならない都市のさまざまな側面——空間構成・社会結合・権力秩序・文化表象など——を読み取ることができる。また逆に、都市のこうした諸側面が、疫病に対応する過程で形づくられ・つくり変えられてきたとも言える。疫病と都市の結びつきからは、多様な論点を抽出できるはずである。

疫病は、都市を物理的に破壊することはないにせよ、災害の一種である。3.11以降、都市と災害の関わりの問題が都市史研究において急速に関心を集めつつあり、他方で疫病研究は、医療史研究のうちでもっとも豊かな蓄積をもつと言える。

本シンポジウムは、中近世・近代の日本、前近代の中国、近代のイギリスをフィールドとする報告と、

建築史からのコメントをもとに、「疫病と都市」のかかわりを

検討することで、都市史研究の近年の動向に寄与することを試みる。

12月19日 13時—16時

都市史学会総会(会員のみ) ※12時50分からアクセス可(Zoomミーティング)

研究発表 司会||吉澤誠一郎(東京大学) ※14時20分からアクセス可(Zoomウェビナー)

12月20日 10時—17時30分

基調講演||Withコロナ時代の羅針儀——都市と感染症——山本太郎(長崎大学熱帯医学研究所)

司会||伊藤 毅(青山学院大学・東京大学名誉教授) ※9時50分からアクセス可(Zoomウェビナー)

シンポジウム 疫病と都市 ※13時20分からアクセス可(Zoomウェビナー)

趣旨説明||勝田俊輔(東京大学)

日本中世の都市と疫病——高橋慎一郎(東京大学)

清末の中国都市における天然痘対策——曹 貞恩(慶熙大学校)

近代都市と「衛生自治」——「貧民部落」をめぐる——小林丈広(同志社大学)

都市における疾病流行への認識——ヴィクトリア時代ロンドンの場合——永島 剛(専修大学)

コメント||初田香成(工学院大学) ※コメント後、全体ディスカッションを行います。

